社エンドユーザーまでの配送を集約することで、より専門的・効率的な輸送を目指す。また、積載率の向上によりＣＯ$_2$削減が期待され、環境に優しい化学品物流を推進する。

今回は、東北エリアを対象として、幹事物流会社にサンネット物流（本社・千葉県市原市、本多昇社長）を起用することとし、今後は他のエリアについても参加会社を募りながら展開を図っていく構想にある。

化学業界はこれまで、食品やビール・飲料、日雑品など他業界と比べ、共同物流の取り組みは遅れていたが、ドライバー不足の深刻化や、路線会社も危険物、長尺品、嵩高品を敬遠するなど貨物の引き受けが制限されるようになり、化学品物流でも車両や倉庫といったインフラの共同活用の動きが始まっている。

これまでに、４社（三菱化学、三菱化学物流、住友化学、住化ロジスティクス）が昨年７月から、三菱化学の水島事業所（岡山県倉敷市）、住友化学の愛媛工場（愛媛県新居浜市）

風

より次元の高い物流を

○…「（物流の環境対策で）」グローバルな取り組みはこれから。特に包装に関しては改善の余地が大きく、日本の包装技術を水平展開する」と話すのは、**ダイキン工業の生地幹物流本部本部長**。10月13日の全国物流サービス研修発表会でのひと言。「化学メーカーとの共同輸送について改正物流総合効率化法での計画認定に向けた申請を検討している。コンテナのラウンドユースは海外にも展開できる」と報告。「この30年間、協力会社の皆さんと蓄積してきた物流ノウハウ、お客様やモノづくりも巻き込んだスルーの物流改革の理念に最新の技術を織り込み、戦略経営計画『ＦＵＳＩＯＮ 20』の高い事業目標を実現する強力な武器に練り上げ、より次元の高い物流をグローバルに展開していきたい」と意欲を見せた。

生地　幹さん

乗務員の平均年齢〝39歳〟

○…「人材不足が課題になっているが、当社ではドライバー数が若干増え、平均年齢も39歳と非常に若い。特積みは手荷役が多いこともあり、若い人が揃うと会社に力がつく。ただ、会社が変わらないと人は来ない」と話すのは、**松岡満運輸の佐藤孝雄社長**。10月14日に開かれたＦｉｔシステム協議会の設立総会の懇親会で挨拶した。佐藤氏は「当社は働く環境づくりをずっと進めてきた。昔は、面接に来た人がターミナルを見てそのまま帰ってしまうこともあったが、この16年間で18ヵ所のターミナルを改修し、車両も綺麗なものにした。あとは労働時間の問題で、管理職も今年から時間外制にするなど、従業員が早く帰れる会社に向けて取り組んでいる」と紹介した。

佐藤孝雄さん

下町ボブスレー、海外へ

○…東京都大田区の町工場が中心となって開発した国産ソリ「下町ボブスレー」。「当社では下町ボブスレーの本体を入れるコンテナボックスを預かっている」と話すのは、**醍醐倉庫の醍醐正明社長**。「下町ボブスレーはソチオリンピックでは日本チームから採用されず、平昌オリンピックでも採用されないこととなった。しかし、平昌オリンピックを目指すジャマイカチームの採用が決まり、当社の倉庫で保管するコンテナに収納し、遠征先のカナダに向けて出荷した」。醍醐倉庫は「下町ボブスレーネットワークプロジェクト推進委員会」の協力企業にもなっており、10月15日に本社倉庫で開催されたバザール「道々橋の蔵出し市」でも、下町ボブスレーを展示した。

醍醐正明さん